



ビッチイーター

BITCH
EATER

試し読み版

For Adult Only

あー
やりたいのう
やりたいのう

んあ
俺あ生身の女とは
20年ヤッてねえよ

お前たちそんなに
やりたいのか？

あ〜？

…どうだ
私とセックス
しないか？

おおお!?
本当か？

こりや
ありがてえ!

…んん？

ああ…

情けない
話だ…

んん〜!?

淫呪 いんじゆ

～醜女の狂宴～
まるよしひさ
時丸佳久

私としたことが
ゼムリアに呪いを
かけられるとは…

なんでも男達には
容姿端麗な私の顔が
とても醜く見えて
しまつそつだ

しかも呪いを
解くには

男達に
この醜さが隠れるほど
活される必要が
あるとさう…

信司しんじによれば
オナ禁おなげんしても
勃起ぼつきできない程の
容姿だと…

No THANK YOU



まあこの飢えた
男達なら

サクッと
ヤツてくれ…

かあ〜っ
チエンジ
チエンジい

…は？

し…
失礼な!

この私が
相手をして
やるというのに
チエンジとは
何事だ!!

なんだ
このブスッ

鏡かがみって道具
知しってるか!?

知しってるわ!!

デンデン虫
みたいなツラ
しやがって

チンコ
勃はつかよ
バーカ!!

化物まものじゃ
ないか!?



まあ…

体は…

美味うまいそう
だよなあ

んまあ
土下座して頼めば

一発やって
やらんでも
ないぜ？

くっ…調子に
乗りおって…

土下座あ!?

だが…
この者達さえ
嫌がる私を一体
誰が抱いて
くれるのだ…!?

醜いままでは
淫神が見向きも
せぬ…!

他に手は
ない…!!

わかった…
土下座だな？

おいおい
違えよ!

尻は
こっちに
向けな!

てめえの顔より
かわいい尻で
頼むんだよ!!

く…っ

呪いのせいだと
わかっていても

販されるこ
いつのは

思ったより
つらいな…

…これで
いいか？

おおっ
いいねえ♥

よしじゃあ
お願いしてみな

下の口
パクパク
させて

どうか私の
おまんこ犯して
くださいってなあ

ち…膣は

こっち見んな
ドブスがつ

嫌なら
いいんだぜ!?

ぐう

ど…どうか

私のおまんこ

好きなだけ
犯して…
ください

ぎやははっ
マンコが喋ってる
みてえだぜ

ばく

ばく

膣は使わせ
たくないが…

しかた
あるまい…

空間歪曲の
術でこまかす
しかない

ぎやははっコイツ
いっちょまえに
濡らしてやがるっ

おらっ
どんな風に犯して
ほしいんだ?

オナリながら
言ってみな!

あうっ

わ…わたしの

私の…
おまんこに
ペニスを…

ペニスって
なんだ!?

きめーんだよ
むこう向けっ

チンポ…チンポを
ズボズボして

おまんこ
ザーメンで
いっぱいにして
ください

くそ…これも
あの女の
狙いか…

おうちよつと
勃ってきたぞ

しゃぶって
もつと硬く
しろや

きつと
どこかで見て
喜んでるの
だろうな…

あ…あ
わかった…

返事は
ハイだ
ドブスが!!

…はい

臭っ

む

わあ

一体
何日洗って
ないんだ!?

まだ寒くて
水浴びできねえ
から臭えだろお

今の
私の顔は

ちゃんと
キレイに
しろよお♡

こんな物
より醜いと
いうのか!?

おおっ
こりゃあ
すげえ♡

すげえ上手え
じゃねえかブスの
ねーちゃん!

そっそうか!
そうだろ♡

私のテクで
メロメロに

うっわ
こっち見んな
ドブスがつ

萎えるん
だよっ!!

そのツラ髪で
隠しとけっ!!

……

おおっ
上向いてりゃ

ドブスのツラ
見なくてすむなあ

そりだ
かわいいJKに
啜えてもらってる
と思うわ♥

ああ、
JKのくちマンコ
きもちいい♥

それじゃコイツ
オナホールじゃ
ねーかよ♥

オナホのが
よっぽど
かわいいわい

でもマジで
いい体してん
なあ、

揉み心地も
最高だぜ

マンコも
柔らかいのに

しっかり
締めつけてくる
じゃねえか

むん、
むん

どうだ
ちんぽ挿れて
ほしいか
オナホ女あ？

おおっ
イクッ

オナホ
女で…

イッ
アッ
♡

うわっ
こんな女で
イッちまった
のか!?

あーあ
汚えツラが

もっと汚く
なっちまった

くう…

正直
めげそうだ…

はあ

はあ

オオ

ストリップ イーター

STRIP
EATER

最近有名ファッションモデルが
突如性的に乱れる事件が発生する
という事で潜入すること
なったもの…

華やかな
ところだが
確かに淫神の気配を
感じるな

これだけ
大勢の人間がいたら
誰に取り憑いているのか
わからないな

準備お願いします

うむ

流石に少し緊張するな

この大勢の中
見つけられるといいんだが



!?

身動きが取れない…!

私だけでは
ないみたいだが
なんだ…!?
淫神の仕業か?



体が
勝手に…!

はっ♡

はっ♡

他のモデル達も
私と同じような
状態になっている

間違はなく
淫神の仕業だ…!

ふんっ
こんなポーズをさせられても
恥ずかしくもなんともない

たまには
一分の隙もない
完璧な肉体を他人に
見せつけるのも
よかろう



このカメラのフラッシュ
何かおかしいな

フラッシュを浴びる度
体の中から
熱くなってる

どうやら性欲を煽る力が
あるみたいだな

どおりで濡れてくるわけだ

誰だ…淫神は…!

コイツ
だろっか？

仕方ない
手当たり次第に
探すしかないか

何だ？
カメラマン達が
一斉に上がって…

ウハ！
コイツは極上の女だぜ

こんな上玉
なかなかないぜ…！

今日はいいい日だな！

私をオカズに自慰を
しているのか？

いきなり何を…？





出会って突然ぶっかけてなんて
とんだご挨拶だな...!

それに
こんなことをしても
私には...

んなっ!



子宮が
ビクつく...!

何故だ...!?



膣を刺激された
わけではないの...!

精液をかけられて
異変が起きたといづことば...

もじゃ...
精液に力を込められる
淫神か!?



たっ
たっ

まだまだぶっかけて
あげるからね

いやーほんっと
君かわいいねえ

これはまじっ!
まじっ

絶頂してばかりでは
神加の戯を行うことも
ままならん!



この状況を切り抜けるには...

お...おやお前たち...



ほ…ほおら

ほおる

顔や体だけでなく体内も
犯してみてもどうだ♥

俺の精液を味わえ〜!!

かかった!

ノリノリだなw

コイツ本物のビッチだぞw

少しの間の辛抱だ

カメラマンたちの精液を
搾り取れば力も多少
弱まるだろう…!





精液が触れた
ところが熱い！

やけどして
しまっそうた……

しまった！
体内に精液を取り込むと
絶頂する力が強まるのか！

こんな弱そうな男達の前で
身動きが取れなくなるほど
絶頂してしまうなど……

呪詛喰らい師外伝ノ外伝 個人アダルトビデオ撮影

不爆輪調

梅雨あけの平日、日が傾いてきても蒸し暑さが残る中、常磐城咲妃は槐宝学園からそう遠くない喫茶店を訪れていた。

カランコロンと小気味よい音がドアの開閉とともに鳴り、制服に身を包んだ美少女退魔師は店内に足を踏み入れる。

「いらっしやいませ、お一人様ですか」

「いえ、待ち合わせをしています」

丁寧なウェイトレスの対応に返しながら、咲妃は店内を見回した。

すると奥のテーブル席にいた軽薄そうな男と強面の二人がヒラヒラと手を振っているのが目に留まる。

店員に会釈をすると、豊かすぎる胸を揺らしながらそこに向かう。

「馬場園さんと牛込さんですか」

「はい、ということはおなたが」

「はじめまして、連絡させていただいた常磐城咲妃です」
ペコリと頭を下げた咲妃。

綺麗な黒髪が肩からこぼれ落ち、制服を押し上げる双実がたわわに揺れた。

「こちらこそはじめまして、あらためまして、私が馬場園、こちらが」

「牛込です」

外見に似合わない丁寧な挨拶をした二人は、咲妃に自分たちの対面に座るよう促した。もっともすでに視線は彼女を品定めするかのよう動いていたが。

「さて常磐城さん、いや、呪詛喰らい師だっけ？ 下手な駆け引きはなしでいこうと思うんだけど、どう？」

「！」

呪詛喰らい師。

人外の快楽と呪詛を喰らって払う、咲妃の異名である。

それを知っているということは――

(やはりこの男たち……)

警戒色を強めた退魔美少女は、鋭い目つきで詰問する。

「私の通り名を知っているということは、当然淫神みだらがみについても知っているということだな？」

咲妃の口調が変わった。

「まあね、なんなら仲よくやってすらいるよ。お互いウィンウィン、みたいな」

「それは過信だ。いずれその力はお前たち自身を滅ぼすことになる。そうなる前に、私に祓わせて欲しいんだ」

へらへらと語る男たちに、彼女は真剣に訴えた。

淫神、強い想いを持つ人間に取り憑く墮落しかけた神。

堕ちかけた神々を慰め浄化するのが神産みの巫女たる咲妃の役目だった。

神の力は超常だ。

それは一般人には身に余る。

たとえ取り憑かれた人間と相性がよく一時的にコントロールできたとしても、最後には必ず滅

びを迎えてしまう。

「んーでもさー、そのミダラガミ？ ってのに取り憑かれてから俺らの動画絶好調なのよ。女をよりひいひいよがらせられるようになったし、これが無くなったら俺ら収入源無くなって路頭に迷うんだけど。そうになったら咲妃ちゃん責任とってくれんの？」

馬場園と牛込、彼らはいわゆる個人アダルトビデオの撮影家であった。

アダルト動画投稿サイトに過激な露出ものを多くアップロードし、その手の界限ではかなりの有名配信者なのだ。

咲妃の通う学園に比較的近い場所で活動していた彼らは、最近女子生徒をナンパしてそのまま露出撮影をするというシリーズを投稿していた。

その撮影現場をたまたま見かけたらしい槐宝学園の女生徒が、咲妃に相談をしにきたのだ。

曰く、馬と牛の化け物を見た、と。

最近ツイッターなどでもまことしやかに噂されていた馬男と牛男、そして二人の過激露出配信者。

咲妃はこれらの情報から、彼らが淫神、ないしはその手前の亜神あしんに取り憑かれているのではないかと推測した。

そして動画を見て確信した。

この二人は憑かれている。

画面越しから伝わる常人が放つことのない淀んだ神気。

彼女はすぐに馬場園と牛込にコンタクトをとった。

騒ぎになるのを避けるために、普段自身の美しさを抑えている認識阻害の呪印を弱めて写真を添付すると、すぐに返信と会談の日にちが送られてきた。

こうして咲妃は学園から少し離れた喫茶店で馬場園と牛込を説得しているのである。

「それは淫神の力なしでやっていってもらえないかな。動画を見させてもらったが、淫神の力を得る前もなかなかいい動画を撮っているじゃないか。もっとも女子生徒に手をだしているのは擁護しかねるが」

「へえ、動画撮影やめろとは言わないんだ」

「本人同士の合意があればいいと思うぞ。まあいくつかは強引すぎるとは思ったがな」
卑猥な動画の話を涼しい顔で続ける呪詛喰らい師。

そんな彼女に、馬場園は、

「わかった！ 俺たちだって命は惜しい、それに俺たちの動画を否定しない咲妃ちゃんのお願いなら聞く気になるってもんだよ」

意外にも素直に神伽かみとぎの儀、淫神を祓はらう封印式を了承した。

「おいはばっち！」

「まーまーうっしー、でもさ、それでもやっぱりこの力が無くなるのは惜しい。だからさ、最後に俺らにとびっきりのエロ撮影をさせてよ。めっちゃ過激なやつを」

慌てる牛込を制しながら、金髪男は咲妃に提案をしてくる。

「まあ内容によるが……、そもそも淫神の力を使った性交は一般の女性には——」

「だからさ、ちゃんんと訓練受けた娘ならいいんだろ？ 例えば、咲妃ちゃんみたいな」
腹が立つほど真っ白な歯を見せながら、馬場園はにやつく。

「そういう魂胆か」

やれやれといった風に苦笑する神産みの巫女。

まあ当然と言えば当然の流れである。

彼らのような人種が、完璧でありながらなお進化する余地があるという矛盾を抱える咲妃の身体を抱くチャンスを見逃すはずがなかった。

「どう？ 俺らの最後の撮影に付き合ってくれてるってんなら、素直にミダラガミつてのを返すよ」
目の前の可愛らしさと美しさを両立した女性が、自分の提案にどういう反応をするか、長髪の男は楽しんでる。

(決して淫神が暴走する可能性もゼロではないか)

数秒黙考したカースイーターは、

「いいだろう！ お前たちの望み、この常磐城咲妃が叶えてやる！」
力強くハメ撮りに同意した。

「っしや決まり！ んじゃ咲妃ちゃん連絡先おせーて」

「ああ」

撮影の時間や場所、内容は後日ということでその日は解散となった。

「なああばばっち、本当にこのなんとかってやつをあの娘に渡すのか？ そりゃたまんねえ身体してたけどさ……」

咲妃が店を出た後、牛込は馬場園に不満そうな声で話しかける。

納得いかないという顔の短髪に、馬場園はそこそこイケメンな面を信じられないほど醜く歪めて笑う。

「んなわけないじゃん(笑)。ウツシー純粹かよー。逆だよ逆、この力使つてあの娘を俺らのおもちやにすんのよ。見たろあの身体、あれ堕とせりゃ動画の再生数半端ないことになんぞ。つい

でにアレでばつちり舐^しけてやろーじゃん」

ゲスの極みを体現したかのような金髪の言葉に、

「うーわばばつち鬼畜う！」

相棒は少しも罪悪感の感じられないトーンで返すのだった。

少年は心臓が熱く脈動するような、止まったかのように冷えているような、不思議な感覚を覚えていた。

年齢を隠してエロ画像収集用に作ったアカウントは、今やハメ撮りや過激な露出動画を投稿するアカウントをいくつもフォロワーしていた。

中でも彼のお気に入りには、「ばばつち」が投稿する動画であった。

彼は相手の「ウッシー」とともに「牛並馬並チャンネル」という個人十八禁動画チャンネルを運営していた。

登場する女性は全員もれなくレベルが高く、動画投稿サイトの人気ランキングの常連だ。

そのばばつちが、今朝ツイッターで、

「おざつす、リスナーのみなさん！ 今日投稿される動画はマジでベーヤー！ とんでもないスケベ美少女が撮影に協力してくれました♥ これマジ歴代最強、夜に投稿されっから、みんな見てくれよ！」

などつぶやいたのだ。

これだけならいつもの煽り文だと流すこともできた。

しかし添付されていた画像がそれを許さなかった。

とんでもない身体だった。

画像に写っていたのは、手で目元を隠したコートを着た女性、それも凄まじくメリハリのきいた体型の女性であった。

顔に迫るほどの大きさの爆乳、ほどよく筋肉がついた美しいウエスト、乳に負けないほど巨大な尻、腰に届くほどの艶やかな黒髪に、目が隠されているようながわかる美貌、そして何よりその完璧な造形美を誇る肢体に巻きつくボンテージがいやらしさを加速させる。

美しさと卑猥さが絶妙にミックスされた、男なら絶対に放っておかないと確信できる美猥な女だ。

この人があの二人に弄もてあそばれる、いやすでに弄もてあそばれた後なのだ。

少年はその妄想だけで射精した。

おかげで学校に遅刻しかけたが、そんなことは些細なこと。

授業など頭に入るはずもなく、その日は一日中勃たちっぱなしのペニスをクラスメイトに悟られないようにするのが精一杯だった。

授業が終わると一直線に帰宅、その後はひたすらばっちのアカウントを更新しては動画がないことにしょんぼりする、という無意味な行為を繰り返した。

そして悶々としながら夕食をとり、部屋に戻ると――

動画へのリンクが添えられたばっちのツイートがついに投稿されていた。

もうなにも考えられなかった。

すぐにリンクをタップして、ロード中に準備していたイヤホンにスマホに接続。

心臓は早鐘をうっているというのに、腹の底は冷えたような不可思議な感覚。

興奮する少年の目に、ついに開始された映像が映りこんだ。

「はいこんにちはー、ばばっちと」

「ウッシーの」

「素人露出〜!」

お決まりの挨拶とともに二人の男が画面に写し出された。

なよっとした長髪のお金髪、がっちりとした体型で高身長のお短髪。

個人アダルトビデオ撮影会の人気投稿者、ばばっちとうっシーである。

「やーウッシー、今日はね、とんでもない女の子が来てくれましたよ」

「いやいやばばっち、悪いけど、今までいろんな女性を見てきた俺が、今さらちよつとやそつとの女の子では驚きませんよ」

確かにこの強面、過去の動画を確認するだけでも数十人の女性を抱いている。

並みの女では反応すらしないかもしれない。

しかし少年は確信していた。

あの人なら、絶対にこの男を満足させられると。

「そうかな? じゃあそんなウッシーも驚く今日の女の子が、こちら!」

白々しく焦らしながら、馬場園は画面外に手を伸ばす。

少年は射精した。

自分でも信じられないが、スクリーンの向こうに現れた女性を見ただけでペニスを制御できなくなってしまうのだ。

長い髪に大人の色気と可愛らしい幼さが完璧な比率で調和した美貌、着ているコートから出てくる生足はラバーガーターのようなものでおおわれ艶かしさを強調する。

そして厚い生地を押し上げる爆乳に負けないほどの大きなお尻。

画像で見るより数段魅力的なあの女性だった。

「どうも、常磐城咲妃、現役の女子生徒だ」

二人の間に立って自己紹介をするグラマラス美少女。

「え、ちょいちょいちょい、ばばっち！ え、これ大丈夫？」

わざとらしく驚いて見せる牛込に、

「だーじょうぶだいたいじょうぶ、それより見てよこの娘、可愛いでしょー」

馬場園は半笑いで軽薄に返す。

「可愛いなんてもんじゃないよこれ！ 毎度毎度ばばっちはどっからこんな美少女たち連れてくるの？」

「おっとそれは企業秘密でつす♪ でねウツシー、この咲妃ちゃん、可愛いだけじゃないんですよ。このコートをめくると」

台本もあるだろうが、半分以上は本心だろうウツシーの言葉をはぐらかし、ばばっちは咲妃のコートの前をはだけた。

再び、少年は射精する。

無理もない。

美しさの極致に達している少女は、コートの下に革帯、ボンデージと呼ばれるものしか着ていなかったのだから。

「うっわ！ えっろ！ なにこれボンデージってやつ？ 咲妃ちゃんいつもこんな着てんの？」

早くも無遠慮に革帯を触り始めたウツシーは、テンション高くまくしたてた。

「ああ、制服の下に着こんでいるぞ」

反対側では金髪が胸や尻を触り、その感触を楽しむ。

「おいおいおいおい、まーじでどすけべちゃんじゃーん、露出狂かよー」
相方に習い豊乳を揺らした短髪は、革越しに下半身も刺激する。

「しかもおっぱいもお尻もデツカイし、それでいてくびれるところはバッチリくびれて、こーんな最高の身体をいっつも疼かせてんのかな？」

外部からの刺激を受けた爆乳美少女の三点勃起は、快楽を与えてくれる存在を感知して早くもムクムクと自己主張を開始した。

「ん、そんなことは、ないぞ。いろいろと事情が、あ、あつてな」
声を押し殺し、咲妃は猥問にも動じず応える。

「乳首ピン立ちさせていっても説得力ないねえ。本当は見られると感じる変態なんだろう？」

そんな彼女を両サイドから男どもが責め立てる。

レザーを押し上げる乳首を擦り、太ももを撫で、尻を驚つかむ。

張りとかさを兼ね備えた最高の肌触りが、数十人の女を食い散らかしてきた男どもを飽きさせない。

「見られる、ふっ、のは嫌いではないが、っ、変態、では……」

昂りを抑えながら反論しようとする神産みの巫女だったが、

「嘘ついちゃだーめ、クリちゃんこんなにして、お、マン汁もう出してんじゃん、はーい咲妃ちゃん痴女かくてーい」

「そういう悪い娘にはお仕置きのチュー」

「あむ、んじゅっる、るるるろ、ちゅる、んむ、ふう」

口づけで言葉を封じられ、スイッチの入ってしまった身体は男を悦ばせる反応を自然にしてし

まう。

画面の向こうに見せつけるように唾液を交換する咲妃と馬場園。

かつての調教で口内でも絶頂できるように躑けられた呪詛喰らい師は、身体をひくつかせながら男の舌を受け入れる。

ざらつく感触が口いっぱいに広がり、荒い鼻息が顔をくすぐる。

(煙草でも吸っているのか口臭がきついな……、嫌いではないが。ん、もつとか、もつと舌をか
らめあいたいんだな)

濃厚なキスは口内分泌液のかけ橋をひいて終わり、堪能した金髪は舌舐めずりをしたのち咲妃のボンデージを強引にずらしてきた。

シコリ昂った上半身のクリトリスが外気にさらされる。

可愛らしくもいやらしい淡い桃色の小果実は、異性はおろか同性でも撫で触り、舐めしゃぶり
いじめ抜きたいという加虐心を煽ってくる。

「ありやいや、乳首もこーんなにしちゃってまあ」

ごつい指と長い指が、それぞれ乳頭を撫で始めた。

「……っあ、ふう、しかし、大胆だな。誰かに、ばれたら、っ、とは考え♥ ないのか？」
存外優しい愛撫に、咲妃はうっとりとしてしまう。

「へーキへーキ、むこっかわはコートで見えないから」

「いややっべえなこれ、おっぱいでかすぎでしょ。何センチあんの？」

タップと柔らかな乳房を揺らしながら、牛込が質問する。

「以前測ったときはIカップだったか。それからまた大きくなった気もするが」

「うへえ！ じゃあ今Jカップ？ これ過去最高サイズじゃん！」

腕の中で弄ぶ獲物の特上さを再確認し、興奮を募らせた二人は乳首責めを無意識に加速させた。
「あんっ、こ、こら、乳首、んあ!♥」

「きれいなうえに感度良好♪ 下はどうかな?」

強気なわりに快感に弱い極上美少女は、二点から発生する悦波えっぱに身体をくねらせる。

「ふっ、ふっ、お、んお、そんな、三点責め、は、くう!」

「うっわスケベな音させちゃってまあ。どうやったら十数年でここまで淫乱な身体になれんのかな、フッ、そ、う、言われて、も、オっ!♥」

「男漁りまくってんじゃねえのお? この顔と身体ならいくらでも寄ってくるでしょ」

「やっ、ああ、ひゃう! し、してない、ひん! 本当に、あううっ、い、イクッ、んはあ!」

「お、イクねこれ。ウツシー、ラストスパート」

「つけーい。おら、乳首とクリたっぷりしごいてやつからよ、イケ!」

「ちゃんとどこでイクのかカメラに報告しろよ。うっわ、指くいしめすぎw」

「あひ! イクッ、乳首と、クリトリスと、おお! 膣で、イクッ! あ、で、でるううう!」

三点どころか、四点を巧みな指使いで責められた咲妃は、あっけないほど簡単に絶頂した。

扱かれた乳首からは母乳をまき散らし、下半身は歓喜の先走り潮吹きでべちゃべちゃだ。

「おお! 咲妃ちゃん母乳でんのか。何々、妊娠してんの?」

「はっ、はあっ、い、いや、これは、体質、で」

過去に封じた淫神の影響で噴き出すようになった母乳をまき散らし、絶頂余韻に浸る呪詛喰らい師。

「マジかよ。どこまでエロい身体してんのかよ咲妃ちゃん!」

ひゅう♪ と口笛をふき、なおもミルク搾りで遊び始める牛込。

特濃乳汁を噴出させられた咲妃は、なおも身体をびくつかせて恍惚こうこつの表情だ。

「まあウォーミングアップはこれくらいにして、露出撮影といきますか！ 覚悟してよねえ咲妃ちゃん、たつぷりと恥ずかしい思いさせてあげるから」

舌舐めずりして再び巫女の膺内を掻き回す馬場園。

長い指で繊細な中コキをされた退魔少女は、

「ふう、それは、楽しみだな♥」

妖艶な笑みを浮かべて軽い絶頂を味わった。

「こ、こんなところで、か？」

「つまりまえじゃん、ほら早く早く」

「俺らで隠れてっから見えないって」

もう何度射精しただろうか。

先走り汁か本射汁かわからなくなったぬめりを利用して、少年は一心不乱に自慰をする。

画面の中では、歩道橋の上で咲妃がコートをはだけ、ボンテージからこぼれた爆乳を惜しげもなく披露していた。

両脇を馬場園と牛込が固めているが、少し目のいい人なら下の道路から極上な半裸体が丸見えだ。

さすがに恥ずかしげに顔を赤らめる呪詛カリスイ喰らい師イだったが、コートの裾を男どもにがちりとつかまれ、閉じることは許されない。

「すごい格好だね。どうどう、今どんな気持ち？」

未だに乳汁こぼれる勃起豆いびを弄りながら、馬場園がヘラヘラと尋ねた。

迷い家の若妻、咲妃

小説…蒼井村正
挿絵…NO.ゴメス

「見てくれ！ また新しいミステリースポットを発見しちゃったぞ！」

私立槐宝学園の生徒で、都市伝説研究部を主催している男子生徒、岩倉信司が、興奮した口調で言いながら、パソコンの画面に一枚の航空地図画像を表示させた。

「また胡散臭いUFOの墜落痕とか、UMA（未確認生物）の泳いだ跡か？」

呪詛喰らい師の異名を持つ退魔少女である常磐城咲妃は、表示された地図画面を覗き込む。咲妃は、これまで幾多の怪事件に遭遇し、その陰で蠢く、存在を歪められた神、「淫神」を鎮め封じてきた神伽の巫女である。

「いや！ 今回のほそういうのとはちょっと違うんだ。家なんだよ！」

「家……？ む、この、赤い屋根の一軒家のことか？」

地図の真ん中に、マーカー付きで表示された何の変哲もない一戸建て住宅の空撮画像を見ながら、咲妃はつまらなそうにつぶやいた。

「うーん、私の目には、どう見ても普通の家にしか見えないんですけど？」

咲妃の隣で、頬を寄せ合うようにして画面を見ていた女子生徒、雪村有佳も、期待外れと言いたげな表情で声を上げる。

小動物的な可愛らしい顔立ちの美少女である有佳は、その身に宿していた淫神を咲妃によって祓われて以来、同性の恋人同士として深く愛し合う仲である。

「つまんない。こんなので興奮するなんて、バカみたい……」

思いつきり冷めた視線を信司に投げかけながら言い放ったのは、天使の様に愛くるしい顔立ちをした、金髪碧眼へきがんの美少女、瑠那るな・イリユージア。

見た目の可愛らしさとは裏腹に、小悪魔的な一面を秘めた、死霊使いの少女だ。

かつては淫神を狙って、呪詛カク喰らいスィータ師に淫らな罫を仕掛けてきたこともある敵対者であったが、今は咲妃にぞっこん惚れ込み、お姉ちゃんと呼んで慕っている。

「信司、あなた疲れてるんじゃないの？ もうすぐテストなんだから、少しは勉強しなさい！ 毎回追試じゃ、希望の学部に進めないわよ」

信司の幼馴染みでもあり、都市伝説研究部の監視役という名目で参加している生徒会長、稲上いながみ鮎子あゆこが、説教じみた口調で追い打ちをかける。

「よく見てくれよ！ この家が建ってる場所、周囲に道路もない、森の真ん中なんだ」

「森に生えてる木に隠れて、道が見えてないだけでしょ？」

「そんなに否定的なこと言うなら、今週の休みに、みんなで調査に行こうぜ！」

「何言ってるの!? この土日は、テスト勉強するのよ！ 私と！」

「私と！」の所に特に力を込めて言った生徒会長は、メガネのレンズ越しに熱い視線で幼馴染みの少年を見つめる。

「うっ！ そんな目で見るなよ……。テスト勉強はもちろんやるけど、うう〜」

微妙な恋人関係にある信司と鮎子のやりとりを聞き流しながら、咲妃は赤い瓦屋根の家の画像をじっくりと検分していた。

（画像から、かすかに漂ってくる神気……。これは間違いない、「迷い家まよが」だ！ それもかなりの高確率で淫神化しているな……）

表向きは興味無さげに振る舞いながら、呪詛喰らい師は画像の分析を続ける。

古来より伝承されている迷い家、それは、人跡未踏の山の中などに、忽然と現れる家型の怪異である。迷い家そのものは、むしろ有益な逸話が多い存在であるが、それが淫神化しているとなると、話は違ってくる。

(しかし、信司の奴、次から次へと淫神関連の情報をピンポイントで探し出してくるな。退魔機関の調査部に欲しい人材かも知れない……)

ネットに氾濫するデマ情報に翻弄され、分析官の人手不足をいつも嘆いている調査部への推薦を、本気で考える呪詛喰らい師であった。

帰宅後、咲妃はネット会議システムに接続し、退魔機関の本部に、信司が見つけた迷い家のことを報告していた。

『……ふむ、岩倉信司というと、あのムツリスケベな兄ちゃんか？ 相変わらず楽しくやってくるようだな？』

通話の相手、退魔機関の重鎮である武御雷常次が、卑猥なジャスチャー混じりに質問してきた。齢八十になろうとする白髪頭の老人であったが、愛嬌のある貌は艶々としており、瞳は少年の様な無邪気な輝きを放っていて、老いを微塵も感じさせない。

「楽しくやっていますますが、節度は守ってますよ！ 話を戻しますが、偶然にしては、淫神関係への情報ヒット率が高すぎる気がするので、一応、報告を……。もしかして、そういったモノを探知する素質を秘めているのではないかと思っただけですか？」

信司との、ちよつと恥ずかしい記憶を意識の奥底に沈めた呪詛喰らい師は、真面目な口調で返

す。

『そうだなあ。今度、こっちに来る用事がある時に、信司君を連れて来いや。ワシ自ら面接してやろう。久し振りに、咲妃ちゃんの尻も触りたいからな』

カメラの向こうで、両手を卑猥にワキワキと蠢かせつつ、セクハラ老人は卑猥な笑みを浮かべる。

「面接の件、お願いします。お触りは、丁重にお断りします」

不敵な笑みを浮かべた呪詛喰らい師は、退魔機関重鎮のセクハラ発言を受け流す。

『まあ、冗談は置いて、迷い家の調査は、くれぐれも気をつけてな』

「はい。では、明日の夕刻、調査に赴きます。……さて、準備しなければ、な……」

通話を終えた退魔少女は、迷い家についての情報を再チェックし始めた。

翌日の夕方、常磐城咲妃の姿は、山奥に拡がる森林にあった。

（淫神と化した迷い家は、色々と厄介な存在だ。みんなを危険にさらすわけにはいかないから、悪いが、抜け駆け調査させてもらおうぞ）

最寄りの幹線道路まで、神伽の巫女をサポートする部隊、「ヤタガラス」の車に送ってもらった咲妃は、その身に宿した尻尾型の淫神、「淫尾」の力を発動させ、獣道すらない山中を瞬く間に駆け抜けて、地図に示されていた座標にたどり着いていた。

メリハリの利いた肢体を包んでいるのは、長袖のコットンシャツと、アウトドアメーカー製のチノパンツだ。

「身体能力を大幅に強化する『淫尾』、発動の影響で身体が疼くのが難点だが、移動には便利だ

な……。迷い家、発見♪」

凜とした視線が見つめる先には、まるで新築間もないような、二階建ての家屋が建っている。周囲は木々がうっそうと茂った未開の山林なのに、家のある数十坪の敷地の部分だけが、綺麗に整地されていた。

「中に入ってみないことには、何も始まらないか……」

神伽の巫女は、家型の怪異に向かって恐れる様子もなく歩み寄ってゆく。

引き戸式の玄関には鍵はかかっておらず、スムーズに開いた。靴脱ぎ場にも特に変わった様子はなく、下駄箱の上には、一輪挿しに活けられたヤマユリの花が飾られている。

（神気が濃すぎて、探知能力が上手く効かないな。一般人を連れてきたら、たちまち金縛りに陥ってしまう、危険な濃度だ）

都市伝説研究部の連中を連れてこなかったことに安堵しつつ、屋内に足を踏み入れた咲妃の鼻を、かすかにカビ臭いような、甘ったるい香りがフワリ、と、くすぐった。

（新築なのに、以外と日当たりが悪いのか？ ちよっとカビ臭いな……ムッ!）

気配を探っていた呪詛喰らい師は、家の奥から近づいてくる人の気配に気付いて、美貌を強ばらせる。

「……やあ、お帰り。遅かったね？」

親しげな口調で声をかけながら、咲妃を出迎えたのは、岩倉信司だった。

「え？ 信司!？」

「何、ボートと突っ立ってるんだい？ 買い物で疲れちゃった？」

「え？ あ、買い物？」

信司に声をかけられた咲妃は、玄関の上がり口に、大振りなエコバッグが置かれているのに気

付く。バッグの中には、ニンジン、タマネギ、ジャガイモなどの野菜と、カレールーの箱などが入っている。

(あ……そうか、私、夕飯の買い物に出かけていたんだ……)

「ほら、上がって。一緒に晩ご飯を作ろう」

足早に歩み寄ってきた信司は、咲妃が身構えるよりも素早く、抱擁を仕掛けてきた。

「あっ、ちょ、ちよっと!」

いきなりの行為に身を振る呪詛喰らい師であったが、思うように力が入らず、身体を抱き締めてくる腕をふりほどけない。

「おかえり、ボクのカワイイ奥さん♪」

咲妃のメリハリの利いた肢体をしっかりと抱き寄せた信司は、いきなりキスしてくる。

「んむ!? んふう……くふううんッ!」

塞がれた唇の奥から困惑の呻きを漏らす咲妃の口内に、温かな吐息が、フウッ、と吹き込まれてきた。

この家に入った時に感じた、甘ったるい香りをさらに濃縮した様な吐息が渦巻きながら肺まで流れ込んでくると、頭の中が真っ白になってしまう。

白く霞んでいた視界が戻ると同時に、咲妃は、大切なことを思いだした。

(そうか……私は、信司と結婚、したんだ……)

吐息に膨らまされた胸が甘く疼き、下腹の奥が、キュンッ! と喜悅の収縮を起こす。力強く抱擁された身体が火照り、頬や耳の辺りが恥じらい混じりの歡喜に紅潮した。

「はふ……んふ……くちゅ……くちゅ……」

身体の強張りを解いて、「夫」の抱擁に身を委ねた美人妻は、積極的なキスを返す。

「ンッ!? フフツ……あふ、ちゅば、ちゅばちゅばっ……」

一瞬、驚いたように身をピクツ! と震わせた信司であったが、口内に滑り込んできた咲妃の舌を夢中になつて吸いしゃぶり、チノパンツの布地を丸く張り詰めさせた若妻の尻肉をムニユムニユと揉みこねてくる。

(これから晩ご飯を作らないといけないのに、これ以上されたら……)

主婦としての義務感に目覚めた咲妃は、残る理性を総動員して抱擁から脱出した。

「んっ……ちゅば……ハアハアハア……玄関でいきなりディープキスしてくるなんて……まったく、時と場所を考えずに、私を求めてくるんだから……」

まだ、胸の奥をむず痒く疼かせる甘い吐息の余韻に身体を火照らせて喘ぎつつ、目の前の「夫」を睨む咲妃。

「強引にキスして悪かったよ。荷物持つからさ。ほら、晩ご飯の支度をしよう」

爽やかな笑みを浮かべた信司は、エコバッグを持ち上げながら、妻を誘う。

「う……うん。夕飯の準備、手伝って、くれるんだな？」

「もちろんさ! あ、でも、そのまえに、いつもの恰好に着替えてよ♪」

数分後、咲妃と夫は、キッチンで一緒に夕飯の支度をしていた。

食欲をそそるカレーの香りを立て始めた鍋を掻き回している彼女のいでたちは、周囲をフリルで縁取られた白いエプロン姿である。

ただし、その下に着ているのは、深紅の革帯ボンテージだけであった。

メリハリの利いた肢体をさらにエロチックに緊縛した革帯は、爆乳の先端と秘部をかるうじて

隠す程度の幅しかなく、見事に張り詰めたヒップの谷間に深々と食い込んで、尻肉の量感を際立たせている。

（今日の私の身体、やっぱりちょっと熱っぽいな、風邪でも引いたかな？）

「いつもと変わらぬ姿」で調理を続けながら、若き美人妻は身体に気怠い火照りを感じていた。頭の芯にも、熱の膜が張っているような感じで、思考がまとまらない。

「うーん、美味そうな匂いだ。キミは料理も上手で、本当にいい奥さんだね」

背後に回り込んできた信司が、裸エプロン状態の妻の身体をそっと抱き締めてくる。

「こらっ、また、こんなところで!? 邪魔しないで……あんツ！」

エプロンの脇から露出した、スリムに引き締まった脇腹を優しく撫で上げられた咲妃は、鼻にかかった甘い声を上げ、ボンデージボディを軽く仰け反らせてしまう。

「だって、こんなにセクシーな姿を見せつけられたら、ガマンできるはずないだろ？」

「こっ、この恰好しろって言ったのは信司じゃないか!? はうううンツ！」

くすぐったげにピクピクッ! と反応する脇腹のラインをゆつくりと這い上がってきた指先は、エプロンの脇からはみ出た爆乳の丸みをそっと持ち上げ、たわわな果肉の重量感を堪能しながら、やわやわと揉み上げてくる。

「あふ……だっ、ダメだっって言ってるのに……んむっ! んふっ……あふ……」
また、キスされた。

片手にオタマを握ったまま、不自然に首を捻った体勢で口付けを受け入れた咲妃の喉奥に、熱い吐息を注ぎ込みながら、夫である信司は巧みな指使いで爆乳を揉み立てる。

ふにゅっ、むにゅっ、ふにふにふにゅるっ……

片手に余るサイズの、弾力たっぷりな柔肉の半球を、すくい上げるようにして撫で上げ、指先

を小刻みに蠢かせて、きめ細かな柔肌の奥にまで快感を送り込む。

(この人の吐息の甘い香りが胸一杯になって、信司のくせに……上手い……ッ!?)

巧みな愛撫に爆乳を張り詰めさせてしまいがら思った咲妃の脳裏に、一体、誰と比べたんだろう? という疑念が湧き上がるが、すぐに快樂の霧に覆い隠されてしまう。

「フッフ、もう乳首が硬くなってるよ。革越しにもはつきりと感じられる♪」

乳房の先端まで這い上がった指で、薄革ボンデージに浮き出た乳首のポッチを優しく撫でくすぐりながら、紅潮した耳元に夫が囁きかけてきた。

「ンッ……あんッ! それは、あなたの触り方がいやらしいから……はくううっ!」

繊細な愛撫で、さらに乳首を勃起させてしまいがらも、咲妃は喜悅に潤んだ目を細め、背後から胸を愛撫する夫の股間に、肉感的な尻を擦り付けてしまう。

「信司のだって、もう、硬くなってるじゃないか!? ほら、こんなにっ! ンンッ!」

尻にグリグリと擦り付けられる、硬く頼もしい勃起の感触に身体の芯を熱く疼かせてしまいつつ、若妻咲妃は、挑発的な流し目を送る。

「そりゃそうさ。キミの素晴らしい身体に欲情しないなんて、男として恥ずかしいことだからな! いつものように、ここで、しちゃおうか?」

「えっ、でも、まだ夕食の準備が……あむ、んふううう! 信司のスケベっぷりは、学生の頃から変わらないんだな。……そういうえば、鮎子っていう恋人がいたはずだけど、私を選んでくれたんだな。嬉しいけど、本当に私でよかったのか?」

「当然だよ。咲妃……」

熱っぽく火照った脳裏に、いかにも真面目そうなメガネ女子の面影を浮かばせつつ、嬉しげに微笑んだ咲妃はガスコンロの火を止め、後ろ手で夫の股間をまさぐって、ジッパのタブを探り



当て、ゆっくりと引き下ろしてゆく。

ジ、ジッ、ヂヂヂッ……と、ジッパ―音を立ててズボンの股間が開いてゆくと、既に勃起を極めていたペニスが、下着の束縛からも解放してくれと言わんばかりにムクムクとせり出してくる。

「して、いいんだね？」

「……うん。少しだけなら……ほっ、本当に少しだけだぞ！」

欲情した美人妻は、なし崩し的にキツチンでのセックスに突入してゆく。

「ふうふうッ、はふ……んふうふうッ！」

背後から胸を愛撫しつつ、情熱的なキスで口を塞がれ、甘い香りのする熱い吐息が、咲妃の身体全体を膨らませようとしているかのような勢いで吹き込まれてきた。

「はくうう、かふっ！ んむ……んきゅうう……ッ！」

吐息を吹き込まれた胸郭が膨らんだせいで、さらにサイズを増したかのように突出した爆乳の先端をクリクリと揉まれる快感にボンデージボディを震わせながら、咲妃は手探りで夫のズボンをズリ下げ、下着の奥から勃起を引っ張り出す。

「んくううッ！」

妻の指が熱い怒張に絡む心地よさに呻きつつ、咲妃の極上ボディを愛でる夫は、片手で胸愛撫を続け、もう片方の手で、エプロン越しに秘部を包み込むようにして優しく揉み立ててきた。既に奥の方まで熱く潤んでいる性器が驚掴みにされて、むにゅっ、ふにゅっ、といやらしい指使いでこね回される。

「あはううううッ！ やっ、やられっぱなしじゃ、ないぞっ、んくうううッ！」

美脚を内股気味に閉じ合わせて前屈みになり、悩ましげな声を上げた美人妻は、エプロンとボンデージに彩られた極上ボディをガクッ、ガクッ、と震わせながらも、手コキ責めで反撃した。

互いの性器を弄り合う行為は、性感の強い咲妃の方が次第に押され気味になってくる。

「咲妃のオマンコ、凄く熱くなってるよ。もう、濡れてる？」

「……」

卑猥な質問に無言のままうなずくと、信司は嬉しげな含み笑いを漏らしながら小刻みに腰を揺らし、妻の指の輪の中で勃起をストロークさせた。

しゆるっ、しゆにつ、きゅむっ、きゅむんっ！

後ろ手に勃起を握った指に生硬い強張りの感触を伝えながら、夫のペニスが滑らかな手肌に擦り付けられる。

「ああ、咲妃の手、スベスベで、ほんのり冷たくって気持ちいいよ。キミも、もっと気持ちよくしてあげるよ」

大きく腰を引き、咲妃の手コキ奉仕から抜け出た信司は、ピッチリと閉じ合わされた太腿の狭間に、火傷しそうなほど熱く猛った勃起をズリと滑り込ませてくる。

「ひゃんっ！ わっ、私は、料理があるから……もう、この辺で……あはんッ！」

「そんなもの、放って置いていいよ！」

本格的なセックスに突入してしまうのを心配する美人妻に、無責任な口調で言い放った夫は、素股ストロークを開始する。

ずにゅっ、ふにゅっ、ずりゅずりゅずりゅっ！

しっとり汗ばんだ太腿と、摩擦抵抗の強い薄革に包まれた秘部が作り出した魅惑の三角地帯を、猛った牡槍が突きまくり、欲望のままに往復した。

秘部を擦り上げた勃起が、咲妃のエプロンを背後から突き上げ、白い布地に亀頭の輪郭を浮き出させる。

「やつ、くあ、やはああんっ！」

熱い強張りに、革帯越しの敏感性器をグリグリと摩擦される甘美な感触に、セクシーエプロン姿の美人妻は甘い声を上げて仰け反ってしまう。

「カワイイ声だね、咲妃……」

「んくうんっ！」

妻の喘ぎをディープキスで吸い込んだ信司は、両手の指を駆使して爆乳を揉みこねながら腰使いを早め、熱く火照った秘部への摩擦を強める。

「あふう！ んむふううんっ！ くちゅ、ちゅぱちゅぱちゅぱ……んふうう」

悩ましげに細めた目を紅潮させ、積極的にキスに応じた咲妃は、自らも小刻みに尻をくねらせて、キッチンでの快楽行為にのめり込んでゆく。

ピッチリと閉じ合わされた太腿が、素股責めを続ける夫の勃起を締めつけ、充血して弾力を増した秘部との絶妙なハーモニーで快感を送り込んだ。

「気持ちいいんだね？ オレも気持ちいいよ。このまま射精しちゃいそうだ！」

素股ストロークを早めながら、信司は声を上ずらせる。

「ちよ、ちよっと待て！ このまま出したら……!？」

腰が抜けてしまいそうな素股快感に翻弄されながらも、家事に長けた若妻は、エプロンや床が汚れてしまうのを気にしてしまう。

「じゃあ、口でしてよ……いいよね？」

「う……ううう……晩ご飯前なのに……飲ませる気なのか？」

フェラ奉仕を要求された咲妃は、文句を言いながらも、おねだりされるがままに、夫の勃起の前にひざまず跪いた。

(えっ? 信司の、こんなに大きかったか!?)

目の前にそびえ立つ男根の迫力に、美人妻は圧倒されてしまう。

浅黒い肉柱をガチガチに強ばらせ、亀頭冠の張り出しもたくましく屹立したペニスは、手探りで愛撫した時のイメージよりもずっと太く、長く、大きく見えた。

「信司、こんなに大きくして……本当に仕方のない奴だな」

目の前にそびえ立つ怒張から、信司の吐息や体臭をさらに濃縮した様な、かすかにカビ臭い淫臭がムンムンと立ちのぼって、咲妃の身体の奥が妖しい衝動に震える。

「晩ご飯の用意もあるんだから、一回で満足してくれよ?」

夫の顔を上目遣いで見上げつつ言った咲妃は、弓なりに反り返ってそそり勃った肉柱を、滑らかな指先で愛おしげに撫でさする。

「んっ、くううっ、咲妃の指、愛情が込められていて気持ちいいよ」

愛する妻の指に優しく撫でくすぐられたペニスをピクピクと跳ねさせながら、信司は齒の浮くようなセリフを投げかけてくる。

「なっ、何を恥ずかしいことを言ってるんだ! もうっ、黙ってる!」

頬を染めて恥じらいながら、咲妃は巨根の先端にそっと顔を寄せてゆく。

(くううっ! 夫婦なのに……何度もしたはずなのに、何だ、このドキドキと罪悪感は? ああ、ペニスの熱気で、顔が火照る……)

異様な興奮に爆乳をときめかせてしまいがら、咲妃は夫のペニスにフェラ奉仕を開始した。

「んふ、ちゅっ……くふう……熱いッ! あむ……れるっ、ぴちゅ、ぴちゅ、はぶ……ちゅるるっ……」

キスした唇にジンジンと伝わって来る亀頭の熱気を少しでも冷まそうとしているかのように、

美人妻は唾液をたっぷりと塗りたくりながら舌を這わせる。

(信司の味と匂いが、頭の芯まで突き抜けて……ああ、私、信司にフェラしてる！)

夫婦の営みのはずなのに、異様な背徳感が身体の奥底から湧き上がってきて、熱っぽく火照ったボンデージボディがゾクゾクゾクンツ！とわなないてしまう。

「あはあ、咲妃っ！ 気持ちいいよ。もつと、もつと舐めて！」

「言われなくなつて……あむ、んふう……んくつ、ちゅむっ……じゅるるっ」

フェラ快感にだらしなく蕩けた夫の表情に、挑発的な視線を送りつつ、亀頭をパクリと啜え込んだ咲妃は、淫臭の塊のような肉棒に口内を占拠される感触に眉を潜めつつ、緩やかに顔を振り、頬をすぼめて吸引を仕掛けた。

ビクビクと小刻みに脈打つ硬い肉柱を唇で締めつけつつ、舌の上をヌロヌロと滑らせ、喉奥の限界まで迎え入れていく。

「こふっ！ んくっ……はふ……んっんっんっんっ……」

快感に跳ね上がろうとする我がままな勃起の胴に手を添え、動きを制限しながら、食道まで駆使したフェラストロークで夫に奉仕した。

浅黒い巨根は、シロップの様に甘い匂いのする美人妻の唾液で濡れ光り、丸く拡がった柔らかな唇を捲れ返らせながらストロークする。

「んはああ、凄いつ！ オレのチンポ、咲妃に呑み込まれてる！」

恥ずかしい解説をした信司は、緩やかに動く妻の頭部に両手を添えて包み込むようにしつつ、髪を撫で、恥悦に紅潮した耳に指先を這わせてきた。

(んんっ！ 耳ッ！ そんなに優しくくすぐられたら……感じすぎて、頭が痺れる！)

喉奥まで勃起を啜え込んだままなので、文句も言えない若妻は、床に跪いたボンデージエプロ

ン姿の極上ボディを震わせ、豊かなヒップをモジモジと切なげにくねらせながらフェラ奉仕に熱を込めてゆく。

「んふ……ちゅぱつ、はああう……んふ、ちゅつ、あむ、くちゅくちゅくちゅ……」

喉奥まで呑み込んでストロークしていた勃起を一旦吐き出し、唾液にヌラヌラと濡れ光る巨根の威容をウツトリと眺めた美人妻は、今にも弾けてしまいそうな亀頭にキスし、舌尖を小刻みに蠢かせて、敏感な裏スジから尿道口周辺を集中攻撃する。

「んほううううっ！ それっ、いっ、いいよっ、あああ、もう、出そうだっ！」

絶頂が近いことを告げた信司のペニスが、さらに硬度を増し、舌を弾き返さんばかりに張り詰めた亀頭がビクンビクンと危険な脈動を起こす。

「出して、いいぞ……はあう、んむふうう……じゅるるるるるるるううっ！」

蕩けた声で言った咲妃は、爆発寸前の亀頭をしっかりと啜え込み、先端に舌を使いながらきつく吸い上げた。

「クウウウッ！ 出るッ！ オレだけの嫁のッ！ 咲妃の口の中に射精するよッ！」

いちいち言わなくてもいいのに、恥ずかしいフィニッシュのセリフを口走った夫は、口内射精の期待に震える妻の頭をしっかりと掴んで固定し、絶頂を迎えた。

びゅくんっ！ びゅくびゅくびゅくんっ！ どびゅるるるるるるるっ、ぶじゅるるるるっ、どぶどぶどぶどびゅるるるっ、どくっ、びゅるるるっ、びゅるるるるるるるっ、びゅるるるるるるるっ……。

口内で力強く脈打った巨根の先端から、灼熱の絶頂ジェルが勢いよく噴出する。

「きゅふうううんっ！ んむふうううんっ！ んくっ、んくんくんくごくんっ！」

想像以上の射精の勢いと量に目を見開き、喉奥で呻いてしまいなながらも、咲妃は夫が逆らせる欲望の煮詰め汁を、喉を鳴らして飲み込んでゆく。

(ああ、信司がイッてる……私の口の中に、凄い量の射精してる!? 愛する夫の精液飲みながら……私も……イッ、イクッ!)

口内で脈打つ亀頭の舌触りと、熱いザーメンが喉粘膜を火照らせながら、食道をドロドロと流れ下ってゆく感触が、妖しい快感の波となって込み上げて来て、飲精エクスタシーを迎えた身体が、床に跪いた姿勢のまま、ビクッ、ビクッ、と震えた。

熱した蜂蜜のような粘り気と、卵の白身に海水を混ぜたような、決して美味しいとは言えない味の体液を口内に注がれる多幸福感に陶醉しながら、欲情した妻は夫の精液を飲み続けた。

一体、何分ぐらいペニスを吸っていたのだろうか? 勃起を啜えたまま、射精の脈動が治まるのを待っていた咲妃は、萎え始めたペニスをゆっくりと吐き出した。

「ハアハアハア……もお、あんなに出すなんて……口の中、ヌルヌルだぞ……」

絶頂の余韻に紅潮した美貌に恨めしげな媚態を浮かべ、信司に文句を言う咲妃。

「キミのフェラが気持ちよすぎるからじゃないか! ……愛してるよ、咲妃……」

「あ……ああ……私も愛してるぞ。信司……シンッ!」

妙にスッキリした表情で言った夫は、まだ自力では立てない妻の身体をしっかりと抱き締め、深いキスで舌を絡め取ってくる。

(まだ、信司の精液が口の中に残ってるのに……)

恥じらう咲妃であったが、夫の情熱的なキスに絶頂の残り火を煽られ、ディープキスに応じてしまう。

「あふ……んふうう……くちゅ、くちゅ、くちゅくちゅ……ちゅ……ちゅぱっ……」

口内に粘り着いた精液の味を夫にも伝えるかのような強い舌使いでキスを続けつつ、互いの唾液を交換し、吐息を吸い合った。

「おっ！ 今夜はカレーか!？」

貪るようなキスを続けていた夫婦に、いきなり、背後から声をかけられた。

「あつ、オヤジ!? 晩ご飯、もうすぐできるから、食器出して待ってて」

抱擁していた妻の身体から離れた信司が呼びかけたのは、白髪頭の老人だった。

やせ型ではあるが、筋肉質の体躯たいくの持ち主で、年齢不相応に若々しい瞳と、艶々した健康そうな顔色をしている。

「え？ 常次……お義父さん？」

濃厚キスから急に解放された咲妃は、床にへたり込んでしまいそうな身体を流しに手をついて支えつつ、喘ぎの余韻が残る色っぽい声で、「義父」に問いかける。

「なんじゃ？ イチャイチャし過ぎて、頭がボーッとしてるのか？ 夫婦仲が相変わらずいいよ
うで、うらやましいなあ。これは、二人目誕生も期待できるな。ヒヒヒッ!」

スケベったらしい笑い声を上げた老人は、テーブルの上に食器を並べ始めた。

「え？ 二人目って……?」

怪訝けげんそうに眉を潜める咲妃の耳に、トトトッ! と軽い足音が聞こえてくる。

「ママ、お腹空いた〜!」

まだ変声期前の声を上げ、キッチンに走り込んできたのは、女の子だと言っても通用しそうな顔立ちをした、細身きんしんで華奢きゃしゃな体つきの美少年だ。

「……私が、ママ!？」

自分が母親だという実感が湧かず、戸惑いの声を上げる咲妃。

「当たり前じゃないか!? ママ、最近、そういう冗談、好きだよね?」

「えっ、いや……そうか、私が……産んだのか」

無意識のうちに下腹をそつと撫でてしまいつつ、どことなく自分に似ている顔立ちの美少年を見つめる。

「さあ、家族が揃ったところで、晩ご飯にしよう！」

微妙な空気を振り払うかのように明るい声で宣言した信司が、アイコンアクトで咲妃に給仕するよう促してきた。

「ちょ、ちょっと待って、先にお風呂に……あんツ！」

「どうせ、終わってからも入るんだから……このまましちゃおうよ」

夕飯を終え、洗い物を済ませた咲妃は、二階の寝室で夫と睦み合っていた。

革帯ボンデージだけのあられもない姿で、敷き布団に仰向けに押し倒された咲妃に、早々と全裸になった信司の筋肉質なたくましい裸身がのしかかっている。

本気で抵抗している様子のない妻を組み敷いた夫は、ディープキスを仕掛けつつ、引き締まったウエストを撫で下ろし、ムッチリと肉感的な尻肉を優しく揉みこねてくる。

(相変わらず上手い……。私の性感帯、知り尽くしているんだな……)

巧みな愛撫に恥じらいつつ、咲妃も積極的にキスに応じ、唾液を交換し合う。

甘酸っぱい芳香を強く感じさせる夫の唾液が口内にトロリと注がれ、力強く動く舌が、若妻の舌を絡め取って、フェラ責めでもするかのように吸いしゃぶる。

「んふ……あふ……くちゅ、ちゅぱ、ちゅるっ、はふ……ちゅぱちゅぱ、ううんツ！」

尻の谷間に滑り込んできた指先に、革帯に守られた秘部周辺をくすぐるように愛撫されると、下腹の奥がカッ！ と熱くなり、呼吸さえままならないほど昂ってしまう。

「そのまま動かないで。身体中舐め回してあげるからね……」

色っぽく紅潮した妻の美貌を見下ろし、優しくスケべつたらしい笑みを浮かべて言った信司は、熱く火照った極上ボディにネットリと舌を這わせ始めた。

「咲妃の身体、どこ舐めてもいい匂いがして、スベスベで、とつても美味しいよ……あふ、ちゅっ、はむんっ、んちゅっ、れるっ、れるっ、ぴちゃぴちゃぴちゃ」

仰け反った喉元をキスと舌で味わい、繊細な肩に浮き出た鎖骨のラインをしゃぶり回し、恥じらう腕を持ち上げて、汗ばんだ脇の下を丹念に舐め清めてゆく。

「ふあ……ああん、お風呂、まだ入ってないのに……くふううんっ！」

恥悦にわななく若妻の、左右の脇下を唾液に濡れ光らせた夫は、仰向けになっても型崩れしない爆乳の曲面をヌロヌロと舐め上げ、革帯に突き出た勃起乳首のポッチを舌先で舐め弾き、甘噛みあまがを仕掛けて、極上ボディに歓喜の震えを強要する。

「ぴちゅ、ぬろっ、れるっ……んふ。キミの腹筋の舌触り、大好きだよ」

スリムに引き締まった腹部に唾液を塗り込め腹直筋の凹凸を舌先でなぞって味わい、へその窪みを執拗に掘り返すように舌を使った夫は、やがて、しっとり汗ばんだ太腿の狭間に顔を埋めてきた。

「ああ、咲妃のここ、ムンムンエロい熱気を放っていて、顔が熱くなっちゃうよ」

「だっ、だから、そういう感想は……きっ、禁止っ！ あはんっ！」

恥ずかしい指摘で若妻の羞恥を煽った夫は、秘部に貼り付いた革帯に浮き出た繊細なワレメを丹念に舐め上げる。

「んは！ アッ、そんなに舐められたら……くふうううんっ！」

薄革越しのもどかしい刺激に秘裂がジンジンとむず痒く疼き、膣奥がグネグネと卑猥にうねっ

てしまうのを感じた咲妃は、肉感的な太腿で信司の顔を挟み込んで、しなやかな肢体を仰げ反らせてしまう。

(中に……一杯溜まつてるのに！)

秘裂にピッタリと貼り付いた深紅の革帯ボンデージは、膣口から溢れ出そうなほど溜め込まれている愛液を塞ぎ止める水門の役割を果たしていた。

今にも迸ってしまいそうな恥液をかるうじて封じている極薄の関門越しに、淫らな愛情に熱く濡れた夫の舌が、優しく、しかし執拗に這い回っているのだ。

(ダメえ！ これ以上舐められたら、溜まりすぎて、弾けちゃウツ！)

もどかしいクンニの快感で、さらに大量の愛液が分泌され、膣内に満たされた熱い悦びの蜜で、咲妃のボンデージ裸身が弾けてしまいそうだ。

「咲妃、自分の指で、ずらして見せてよ。夫婦なんだから、ね？」

絶妙のタイミングでクンニを中断して発せられた夫の熱い声は、目の前で熱く湿った媚香を放つ秘部に直接語りかけているかのようだ。

「うう……ンンッ」

恥ずかしげに呻いた美人妻は、濡れた革帯に、恥悦に震える指をかけ、ゆつくりとずらしてゆく。(ずらしたら……漏れちゃうのに……もう、抑えきれない！)

革帯の下からムニユリと溢れ出てきたのは、艶やかなピンク色の秘裂であった。

ピッタリと閉じ合わされた膣口は、溢れ出しそうな愛液を抑え込むために強ばってヒクヒクと切羽詰まった痙攣けいれんを起こしている。

「咲妃のここ、凄く綺麗だ……ああ、もう濡れているね。輝いているよ」

賛辞の声が、熱い吐息とともに剥き出しの性器をくすぐり、欲情した視線に媚粘膜を凝視され

ると、チクチクと物理的な刺激さえ感じてしまう。

(見られてる！ 私のアソコを、じっくりと……信司に!?)

再び、電気ショックのような羞恥心と背徳感が若妻の裸身を貫いた。

吐息が感じられるほどの至近距離で、秘めやかな部分を観察される恥ずかしさで、ただでさえ熱っぽかった裸身が桜色に上気し、しっとり汗ばんでくる。

「もっと、奥まで見せてもらおうよ」

恥毛のない、滑らかでふつくらと盛り上がった大陰唇の両側に親指の腹をあてがった夫は、ピッチリと閉じ合わされた秘裂を、ヌパツ！ と左右に割り開く。

「あっ！ ダメええ！ 出ちゃ……はああンツ！」

ぷいっ！ ぷびゆるるるるッ!!

「うぷっ！ んんんっ！」

甘い泣き声を上げる美人妻の膣口から、白濁した愛液が迸り、秘部を覗き込んでいた信司の顔をぐしょ濡れにしてしまう。

室内に立ちこめていた甘いカビ臭を圧して、甘酸っぱくこわくてき蠱惑的な愛液の芳香がムワツ！ と熱い湿り気を孕んで香り立った。

「うあ……あああ、すまない……信司……くううう」

「謝る必要なんてないよ。オレの愛撫で、キミのここはこんなに濡れてくれたんだからね。咲妃の全ては、オレだけのモノなんだから……愛してるよ、咲妃……」

色っぽく上気した美貌を泣きそうに歪める咲妃に微笑みかけた信司は、ぐしょ濡れでヒクついている秘裂に顔を埋め、既に濡れている膣前庭に、チュッ、とキスしてきた。

「はうううッ！」

悩ましがな呻きを漏らす美人妻の秘部に唇を強く吸い付かせ、柔らかく濡れ蕩けた性器を口一杯に含んだ信司は、膣内に残留していた愛液を残らず吸い取り、そのお返しのように、フウッ！と、熱い吐息を吹き込んでくる。

「えっ!? あはあああッ!?」

熱い吐息に満たされた膣道が、プクッ！ と風船のように膨らまされる予想外に甘美な感触に、咲妃は甘い悲鳴を上げてボンデージ裸身を震わせる。

肺一杯に溜め込んでいた吐息を残らず吹き込んだ状態をしばらくの間維持していた夫がゆっくりと口を離すと、膣内に溜まっていた空気が、プギュッ、プギュルッ！ と卑猥な音を立てて逆流してきた。

膣奥から噴き出てきた熱く湿った空気には、濃密な愛液の媚香が溶け込んでいる。

「やあああ……ダメえ、きつ、聞かないでえ」

自分の身体から出たとは思えぬ恥音を耳にして恥じらいのピークに達した咲妃は、恥悦の涙を振り撒きながら泣き悶えてしまう。

「普段は強気なキミも、そんな風に恥じらって泣いちゃうこともあるんだね。フフッ、カワイイよ。もう一回泣かせちゃいたくなってくるな……はぶ……フウウウウッ！」

自分の秘部が奏でる恥音に、涙目になって恥じらう新妻の膣口に再び吐息が吹き込まれ、膣壁と子宮を熱く満たされてしまう。

プジュルルッ、ジュププッ！ プギュルルッ！

二度目の恥音は、先ほどよりもさらに卑猥な濡れ音を響かせ、放出を終えてキュンッ！ とすばまった膣口から、白濁した愛液をピュルッ！ と噴き出させた。

それが何度も繰り返され、膣風船の恥音を幾度も奏でられる。

「あ……ああ……奥が、中が……アッ、ああんっ！ 熱い……ッ!?」

ダブルベッドの幅一杯に美脚を開脚した、あられもない恰好のまま、若妻咲妃はしつとりと汗ばんだ肢体を切なげにくねらせる。

(中ッ！ 奥を、満たして欲しい、信司のたくましいモノで掻き回して欲しいッ！)

何度も膨らまされた膣粘膜が熱く疼き、狂おしい挿入欲求を湧き起こらせていた。

「挿れて、欲しいだろ？」

信司の静かな問いかけが、飢えた子宮をダイレクトに震わせる。

「くう……んっ！ きゅうううんッ、ほっ、欲しいッ！ 来て、来てええ〜」

しばらくの間、躊躇ちゆうちゆうしていた咲妃であったが、込み上げて来る疼きを抑えきれず、色香の煮詰めた汁のような甘い声で挿入をおねだりしてしまう。

まるで子宮が上げているかのような艶美な声を上げた呪詛カクスイ喰らい師シの腰がせり上げられ、ヒクヒクと物欲しげに収縮する膣口が愛液の芳香を振り撒いて、夫婦交合を誘う。

「挿れるよ。奥で……子宮を開いて、しっかりと受け止めて……」

勝ち誇った笑みを浮かべた夫は、美人妻の細くくびれたウエストに手をかけて引き寄せながら、いきり勃ったペニスを膣口に深々と突き挿れた。

ぬぶっ、じゅぶううううっ！

「はああああんッ！」

膣風船責めで疼きを強められ。トロトロに濡れ疼く膣内に、たくましい肉槍を挿入された咲妃は、凛々しい美貌を喜悦に歪めて仰け反ってしまう。

「挿れただけで、軽くイッちゃったね？ でも、気持ちいいのはこれからだよ！」

筋肉質のたくましい裸身を躍動させ、夫は若妻咲妃の膣内を掻き回し始めた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページに転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

蒼井村正×或十せねかの人気作!

呪詛喰らい師・常磐城咲妃

おっぱい付き 抱き枕カバー

公式サイトにて注文開始!

<http://ktcom.jp/csd/>

裏面は
パンサーガール!

<製品仕様>
サイズ: 1600mm×500mm
カバー本体:
2wayトリコット
(アサヒインターナショナル)
バスタ素材: シリコン
バストサイズ:
直径12cm、高さ5.5cm

価格
1枚19,440円
(税・送料込)

注文締切日
2018年10月15日(月)

発売日
2018年
11月下旬予定

注文が切り後も
販売しております!

(在庫がなくなり次第販売終了となります)

或十せねか描き下ろし!

ただの
抱き枕カバー
じゃない!

表面は
立体おっぱい付き!!!

シリコン製のオっぱい付き。柔らかくて
揉みごたえばっちり! 着脱可能だぞ!

